

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2011年 10月 30日

派遣者氏名（専門分野）	富永 悠介	（文化形態論 日本学）
-------------	-------	-------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	戦後台湾における朝鮮人の処遇について －包摂と排除のプロセス－
-------	------------------------------------

派遣期間

2011年 8月 22日 ～ 2011年 9月 5日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	台湾	台北	国家図書館、国史館	なし
	台湾	台北	中央研究院近代史研究所檔案館	なし
	台湾	台北	檔案管理局	なし

派遣先で実施した研究内容

調査者は、様々な経緯で台湾に暮らすことになった沖縄・朝鮮半島出身者（以下、前者を台湾琉僑、後者を台湾韓僑とする）の歴史経験を、同時代史的視野から考察することをテーマに研究を進めている。課題とすべき問題群は多々あるが、今回の調査では、台湾韓僑が濟州四・三事件や朝鮮戦争を台湾からどのように見ていたのか、そうした出来事が彼・彼女たちの生活にどのように影響したのかを、公文書や新聞、聞き取りを中心に調査することが主な目的だった。以下、その調査・研究内容について報告する。

**【文献調査】**

1. 国家図書館：朝鮮戦争が始まった1950年前後を中心に、当時発刊されていた新聞を調査した。朝鮮戦争、中韓外交に関する記事は散見されるものの、台湾韓僑たちに直接言及される記事は見受けられなかった。

2. 国史館：「台湾韓僑協会」（以下、「韓僑協会」）に関する史料調査を行った。「韓僑協会」は、台湾韓僑たちの生活を全面的に支えた組織であるが、彼・彼女たちと中華民国・大韓民国政府とを繋ぐ役割を担っていた。以上の側面をあわせ持つ「韓僑協会」について調査を行った。また、台湾韓僑に関する多くの史料を閲覧することができた。

3. 中央研究院近代史研究所檔案館：朝鮮戦争における台湾の位置づけに関する史料、また、共産主義国に対し中韓両政府がどのように協力していけるのかを示唆する史料を閲覧することができた。映画やラジオを使った反共政策を実施するといった具体的な政策が書かれてはいるものの、台湾韓僑に関する反共政策については触れられていなかった。

4. 檔案管理局：台湾琉・韓僑及び日僑（在台湾日本人）に関する戸籍や国籍に関する史料調査を行った。台湾への不法侵入や不法就労に関する史料が多い。また、中国共産党のスパイが台湾に潜入し仕事をしていること、技術者として台湾に残った日僑が秘密団体を結成し活動していることが報告された史料なども見受けられた。

### 【聞き取り調査】

二人の方にお話を伺った。台湾に暮らすようになった歴史的背景や経緯は異なるが、戦後の台湾を基隆で過ごしてきた方々だ。名前などの個人情報公開することは出来ないが、お二人が話して下さった歴史証言の一部を紹介する。ご理解頂ければ幸いである。

1. Aさん：日本植民地時代の台湾に生まれた。台湾韓僑二世。朝鮮半島の情勢変動により、帰還することが出来ず、台湾に残ることを決めた。台湾韓僑たちが朝鮮半島をどのように見ていたのかを伺ったが、その当時はまだ子供で覚えていないという。また、北朝鮮を支持した台湾韓僑もいなかったのではないかと話してくれた。

2. Bさん：1960年に韓国の国費留学生として台湾にやってきたBさんは、当時の台湾韓僑たちの生活を目の当たりにし、彼・彼女たちのため奔走した。Bさんは、台湾韓僑で北朝鮮を支持し運動をする人や思想的分裂はなかったと述べる。台湾韓僑のほとんどが漁業で生計を立てており社会主義的な思想に触れる機会はなく、台湾人が共産主義を主張しただけで生活基盤が崩れる当時の台湾社会では、その政治的空気についていっただけであり、苦しい生活をしていた台湾韓僑がそのような主張するならば、それは自らの生死に繋がる問題だったと話してくれた。

### 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今回の調査における研究課題は、戦後の台湾韓僑たちの歴史経験を、朝鮮半島との繋がりの中から照らし出すことだった。その際に注目したのが台湾韓僑の「身分」だった。台湾では「朝鮮籍」が存在しない。このことが抱える問題について、即ち「韓国籍」へと包摂されるのと同時に、そこから排除されたものは何だったのかについて調査することが、本調査の目的だった。史料調査の成果に関して言えば、以上の問題に直接関連する史料・文献が得られたとは言いがたく、課題を多く残すことになった。

それでも、本調査を終えて今考えさせられることは、共産主義者の有無や排除と包摂といった二項対立的な問いの立て方よりも、台湾韓僑が一様に「韓国籍」とされたことの歴史的意味を問い直し、これが彼・彼女たちの「現在」をどのように形作ったのか、その「現在」を彼・彼女たちはどのように過ごしているのかという課題を一つの切り口として「韓国籍」を巡る問題群にアプローチしていきたいと考えている。

### 派遣後の研究発表の予定

2011年10月現在、本調査と関係する研究発表は予定していないが、まずはゼミや学内の研究会で報告をしていきたい。